走り読み文学探訪リバイバル(その16)

「愛と名誉のために」(Love and Glory)

著者:Robert B. Parker(ロバート・パーカー)　訳：菊池光
ハヤカワ文庫(243p,505円)　紹介者:榎本博康

［紹介］

作家志望の青年ブーンは1950年に英文学を専攻するため、18歳でコルビィ大学に入学した。そこで女子学生のジェニファと運命的な出逢いをする。しかしブーンは問題学生として退学になり、20歳なので徴兵された。

行き先は朝鮮。優秀な通信兵として働いた。その合間にジェニファに手紙を書いた。やがて返事がこなくなった。彼女は婚約したのだ。その時から手紙の代わりに、ノートに日記のように思いを書き綴った。

22歳で復員して職業を探した。なかなか思うような職にありつけず、また長続きしなかった。社内誌編集、技術文書作成、機械工、コカコーラ瓶詰め工場、皿洗い、トラ箱、クランベリィ摘み、トラ箱、ホームレス。

西海岸のサンタモニカで正気を取り戻し、再生を誓った。海岸沿いのコーヒーショップに皿洗いとして雇ってもらった。1961年9月、29歳になっていた。

1962年8月に、ジェニファの夫がタフト大学の助教授になっていることを知る。まず聴講生に、そしてタフト大学の2年に編入された。復員軍人援護法のお陰である。そして学内でジェニファに再会する。彼女は出産のあと、修士課程の学生兼助手になっていた。ブーンはアルバイトをしながら勉強し、18ヶ月で学士号を得た。1964年の秋に修士課程に入る。ジェニファに追いついた。1968年6月、ふたりは揃って博士号を得る。36歳。ジェニファは初めてブーンの日記を見る。ジェニファは離婚して、ブーンと一緒になる決意をする。

ベニスビーチ（サンタモニカとロサンゼルス国際空港の間の町）のビーナス(1988.4)

［感想］

すごい題名だ。とても恥ずかしくて電車の中では読めない。しかし解説によれば、映画「カサブランカ」(1941年)のテーマソング、「時の過ぎゆくままに」からの引用とのこと。男は男

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

の筋を通し、女は女の筋を通す、「カサブランカ」はそんな男女の物語とか。

これは甘酸っぱくもじれったい青春小説だ。百キロを優に超える巨漢の作者の自己投影だ。王子様は修行をして立派になって、王女様を迎えに行きましたとさ。

この二人の愛のドラマをどう読もうか。この話はブーンの強引で勝手な思いこみの世界である。愛する女性のためには、自分も相手にふさわしくならねばならないと信じる。正論だが20歳やそこいらでは不可能だ。とてもふさわしい人間になんてなれない。20歳の恋愛とはお互いの未熟さを認め合うが故に成り立つ。

いや、だからこそ、この話が現代のおとぎ話としての価値があるのだ。男女の間柄に限らず、まだ未熟である、もっと成長しなければならないという思いは、前向きに生きようとする人にとって、何歳になろうともつきまとう。それを適当な所で妥協して生きているのが我々だ。例えば中年を迎えようとする読者に、自分の18歳を想い出してみろと訴えているのだ。君にだってその頃に、おとぎ話のひとつやふたつはあっただろうと。

ここでランニングだ。ブーンはサンタモニカ海岸でコーヒーショップの主人に拾われて再生を図る。生活が落ち着いてくると、ノートを買って日記をつけ始め、次に毎朝走るようになった。さらに年末にはＹＭＣＡで重量挙げを始めた。ここでは走るという行為が、肉体と精神の健康、そして社会での健康な生活を象徴している。いかにもロバート・パーカーらしい人間再生方法だ。同じ手をまた使ったという気もするが。

私もサンタモニカを走ったことがある。1988年に2週間滞在した。一人の出張だったので気楽だった。毎朝仕事の前に、崖の上の公園を数キロ走った。多くのランナーが集まってきて、挨拶をしながらすれ違う。エクササイズウォークの老人達もいる。週末には海岸をベニスビーチやその先まで延々と走った。とても気持ちが良かった。しかし沢山のホームレス、職のない若者たち、毎晩の炊き出し、それに並ぶ長い行列。明暗の濃い街だった。歩いていると、金をくれと声をかけてくる。英語が分からない振りをしていると、「マネー」とか「ドル」とか全く誤解の生じない言い方をしてくる。ある時ショッピングセンターの裏手を歩いていたら、未成年の男女が座っていた。男の子が何か言うと、女の子が近づいてきた。お金を下さいだった。とても悲しい気がして、何と答えて良いか分からなかった。このような両面性がある街なので、ここでブーンが暗から明に移ることができたのが、分かるような気がする。

所で、この話のキーワードの一つに復員軍人援護法がある。第二次世界大戦や朝鮮戦争から帰ってきた若者達を、この制度で再教育することにより、米国は二十世紀後半の知識集約型産業社会を強固なものにすることができたという。私たちが闇市ですいとんを啜っている間に、さらにどんどんと差を付けられていたのだ。

愛と名誉、いいじゃないか。自分勝手でも結構。回り道でもいいから誠実に生きたい。そんな気にさせてくれる。

でもここで感想を終わるわけにはいかない。僕の本心は、ブーンは自己中心的で最低だと思っている。話もいかにもご都合主義だ。ハッピーエンドストーリー特有の後味の悪さもある。そう、このくらい文句を言えば、今晩は安眠できそうだ。

（初稿1998.6.30）

サンタモニカ・ピア（1988.4）

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

［リバイバル感想］

サンタモニカかあ。まあ本書のことは既に書いたので、ここではその内容から離れてしまおう。

サンタモニカは私の最初のアメリカ出張地であった。1988年のことだ。その時は確か2週間位の滞在で、プログラムコード導入で２社との契約をまとめて来たのだが、当時の私の立場は研究職であり、その内容を良く知っているから、というのが人選の理由である。契約書の文案も、本社部門の多少の支援もあったが、自分で書いた。そして自分で段取りをつけて、一人で行ってきた。出張を受け入れてくれる現地事務所や商社も無く、本当に個人旅行だった。

一人というのは実に気楽で、会社でとってもらったホテルは超高級かつ海が遠いので、すぐにオーシャンビューのリーゾナブルなホテルに移った。ホテルは海岸のクリフ添いの細長い公園（パラセイズ・パーク）にオーシャン・アベニューを挟んで面しており、小さな観覧車があることでも有名なサンタモニカ・ピアに近い。ホテルに着いて、すぐに着替えて走り始めようとしたら、ホテルの前で道を聞かれた。偶然知っていたので、あそこだよと答えた。このようにオフの時間はサンタモニカ周辺を走り回っていた。週末には当日参加ができる、ロングビーチの8K（エイトケー）レースにも参加した。

しかし表からひとつ道を曲がると昼間からぶらぶらしている若者達がいて、ホームレスも多く、公園での炊き出しには長い列ができていた。このあたりのことは、既に初稿で書いたことだ。話はここからだ。

それからアメリカからの技術者を受け入れ、契約したソフトウェアのインストールをし、システムとしてまとめ、販売を開始した。サンタモニカの会社の社長も来日して、日本での状況を確認した。そして１年が経過したころ、上司が突然、これこれのレターを書いてくれと指示してきた。で、サンタモニカの会社を、営業と二人で来週に訪問するという。私は何も知らされていなかった。

これは営業がセットした、私の上司の社内接待旅行に他ならなかった。訪問しなければならない懸案は全く無かったのだから。それをわざわざ二人で行く。ということは、私の１年前の単独出張は、失敗した場合の責任を私一人に負わせるためだったのだろうか。失敗すれば年をはるかに超えるチーム作業が無駄になってしまうものだった。よくよく考えると、ビジネスなのに会社としての支援が全くなく、現地事務所等の対応も無い、純粋単独出張というのは、研究者にたまにある程度で、聞いたことが無いものだった。危ないものに近づかないよう、みんなで遠巻きにしているような状態だったのだ。

このプロジェクトでは、もうひとつの必須アイテムをプログラミングしたのだが、これも当初はできるかどうか分からないものだった。社内系列で類似のことをしていた部門があったのだが、肝心なことは教えてくれなかった。ただ、私が目指しているものより、はるかにレベルが低いことは分かった。それは研究レベルであって、商用にはできない。これを指示した上司が、できると確信していたかは定かでは無いが、良く言えば一任、内容には一切口を挟まず、これも遠巻き状態であった。

具体的に参考にできるものが無い中で、いろいろと勉強し、最後に完成した基礎式からコンピューターで処理可能な差分式に１日をかけて落とした。穏やかで静かな秋の土曜日だった。

サンタモニカの会社の中庭(1988)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.

後は機械的にコード化するだけで、それ以来プログラムは一度も異常終了することなく、完璧であった。おそらくこれが、私の最後のプログラミングであったと思う。（注：プログラミングは本職ではなく、エンジニアリングです。）

その後のビジネスシーンでは私は後方支援となり、業績は迷走し、経営層によって廃止になった。（ここで、私がこのビジネスを仕切っていたらと言うつもりは無い。当時の私は会社の一部門に属しているだけで、ビジネスのことは全く分からない、世間知らずだった。そのまま一生を過ごせたら、どんなに幸せであったかとも思う。でも違う幸せの道を歩むことになろうとは、その当時は思いもよらなかった。）

ひとりでのサンタモニカの２週間は、実は孤独では無かった。現地の２社の人々は率直であり、親切だった。何よりも異邦人の訪問を、彼らが楽しんだ様子もあった。プログラマは主にインド人たちで、自分の将来のビジネスの夢を語る人もいた。彼らの中間管理職はイラン人で、家族の生活を背負って頑張っていた。営業は南アフリカ出身のオランダ系の女性であって、ビバリーヒルズを案内してくれたりもした。彼女も率直な人だった。こちらが投資をする側であるということを差し引いても、そう感じた。いわゆるトランプ流とは無縁の人々だった。一人で行くことで、貴重な経験ができたと思う。思わずサンタモニカの不動産情報を調べてしまった。

(2020.7.04)

Copyright © Enomoto PE Office, All rights reserved.